慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　1回20日発行

三四会ホームページ

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時　午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

三四会長より新年のご挨拶

三四会長
武田　純三
（52回）

2023年を振り返り、2024年に向けて

新年明けましておめでとうございます。

2023年の三四会は、新会員情報管理システムの稼働で、広報の手段が大きく広がりました。初回登録とご自分の情報の確認を行うようお願いしておりますが、会費支払い、掲示板による会員相互の連絡が可能になりました。また、医学部新聞も全頁が見られるようになり、動画配信も可能となりました。さらに会員全員への一斉メール配信が可能になりました。実は、ワクチン接種協力の依頼が義塾よりあった時に、参加者を募るために一斉メールは本当に必要な機能と感じており、是非とも入れたい機能でした。

2024年は、支部、クラス三四会の活性化に力を入れるつもりです。特に、若い学年へのアプローチを進める予定をしております。

三四会としての新たな取り組みや体制づくり

昨年は支部会の充実を図ってきましたが、新年ではクラス同窓会に焦点を当てたいと思います。クラス同窓会開催や三四会への関心については、クラスごとに温度差があるようですし、若い世代で低い傾向にあります。若い世代の参画を勧めることを考えております。

クラス評議員の先生方を三四会理事会にお招きし、オブザーバーとして参加して意見を頂くことを考えております。差し当たって、連合三田会大会担当学年の先生方から参加を頂こうと考えております。

新年度は、全国私立医科大学同窓会連絡会東部会を三四会が担当の予定です。どの大学も同窓会離れが問題となっているようです。大学の人材育成の良し悪しは、教育成果と言える卒業生の集まりである同窓会を見れば評価できるとの考えより、

・同窓会の持つ意義
・大学は同窓会を大事にすべきである
・同窓会は大学に必要される存在になるように努力すべきである

について考えていく予定であおります。

三四会の皆さんへのメッセージ

同窓会の本質は、愛校心、帰属意識であり、仲間であることへの安心感、心地良さを感じられるかと考えております。すなわち慶應義塾大学医学部への愛校心・帰属意識が無ければ、三四会への帰属意識は生まれてこないと思います。慶應高校の決勝戦での声援を思い出してください。OBは愛校心・帰属意識で応援し、その声が優勝に導いたと思います。三四会員が医学部を支援することが、慶應義塾大学医学部をよくすることに繋がります。

新春特別座談会

ポストコロナの道を走り始めた慶應医学
「その先」を見据えた戦略を改めて問う

2023年は新型コロナウイルス感染症の感染法上の位置づけが5類感染症になり、医療体制や教育活動でも以前のように対面で行える機会が増えてきました。慶應医学においては、10月の新執行部発足、11月の予防医療センター移転拡張と、さまざまな出発点がありました。そうして迎えた2024年には医師の働き方改革が本格始動するなど、主にソフト面での一層の充実が求められる年になりそうです。今年の新春座談会では、医学部、病院、信濃町キャンパスそれぞれの取り組み、および連携体制について語り合っていただきました。（本文中は敬称略）

■聞き手：医学部新聞編集委員長

コロナ後の診療を充実させる取り組みと予防医療センターが示す慶應医療の未来像

門川　新年明けましておめでとうございます。今年の座談会は、テーマ別に話していきたいと思います。まず医療についてお願いします。

北川　医療に関しては、予防医療センターが信濃町から麻布台ヒルズに移転拡張して、大きな一歩を踏み出しました。昨年11月に移転拡張したばかりですが、予防医療センターがこれから作っていく未来型予防医療が、今後慶應が提供する医療の形を方向付けることになるだろうと考えています。そのような将来を見据えて医学部・病院が一丸となってアイデアを出し合い、麻布台での新たなチャレンジを軌道に乗せることを今年の目標としています。

松本　2023年の医療ということでは、新型コロナが5類になり、補助金もほぼ無くなり、いよいよ病院が通常診療で自立しなければならない状況になりました。しかし、コロナ前の診療状況に戻ることは容易ではありません。慶應病院では急性期機能を拡充する取り組みとして、手術センターの手術枠を16列から17列に増枠し、将来的な救命救急センター化も視野に入れて救急患者の受け入れを増やしていきます。また、大学病院にとって不可欠な小児医療についても、再編成しながらさらに充実させていく予定です。

北川　診療状況については、コロナ後の患者さんの行動変容の影響が少なくないと思います。日本医学会連合が行った調査によると、患者さんが二次医療圏を越えて遠方の医療機関を受診する頻度が低くなっています。コロナ禍を経て、長時間の移動を必要としない自宅近くの病院を受診するようになりました。慶應義塾大学病院のように最先端の高難度な治療を強みとする大学病院は、これまで全国から患者さんの紹介がありましたが、コロナ後はこうした前方連携が縮小する可能性があります。松本病院長が急性期医療に注力する方針を打ち出されているのも、前方連携を受け身ではなく積極的に進めていく意欲の表れと考えています。また、当院で急性期治療をしっかりと提供させていただいた患者さんについては、適切かつ迅速に後方連携施設に診療の継続をお願いするという循環が非常に重要になります。

松本　そうですね。私たちは関連病院・施設の皆さんとも連携しながら、慶應病院としてペーシェントジャーニーをつなげるような仕組みを作っていかなければいけません。今年はその第一歩を踏み出す年になればと考えています。

門川　今年はいよいよ医師の働き方改革が本格始動しますが、その対応はどうでしょうか。

松本　働き方改革については当院は2018年から準備を始めて、昨年6月に医療機関勤務環境評価センターに提出した勤務時間短縮計画を承認いただきましたので、東京都の承認を経て今年4月から本格始動となります。具体的な取り組みとしては、タスクシフト・タスクシェア、チーム医療制の推進、勤務時間の精緻化などがありますが、働き方改革は終わりのないものなので、ここから先も継続して努力していきます。

門川　最近はサイバーセキュリティの重要性が指摘されています。特に病院が攻撃された場合の被害は甚大になるため、義塾全体としても注力しているようですね。

松本　攻撃を受けた他院のケースでは病院機能が完全に麻痺していましたし、それにより患者さんたちの生命に危機が及ぶことにもなりかねません。そうしたことを受けて厚生労働省はガイドラインを改正し、特定機能病院の立ち入り検査項目にサイバーセキュリティ対応を加えました。慶應病院でも大規模災害が起きたときの復旧対策などをまとめたBCP（Business Continuity Plan：事業継続計画）の策定を含め、サイバー攻撃により病院システムに障害が起きたときの病院機能の維持や復旧対策なども含めた具体的な取り組みを進めているところです。

北川　はい。大変光栄なことに私立大学として初めてWPIに採択され、2023年から本格的に始動しました。こちらは医学部、薬学部、理工学部というキャンパスの異なる3学部が連携して研究を行うことになるため、研究メンバーが一同に介して研究を展開できる場を設置する必要があります。現在は医学部のエリアを使用していますが、慶應義塾が研究というフィールドで国際的な地位を確立するためにも、世界中の研究者が集まれるようなフラッグシップとなる拠点を今年から来年にかけて構築したいと考えています。

金井　WPIに採択されたということは世界標準の研究機関として認められたということですが、慶應ではもっと若手研究者を増やさなければいけませんし、世界的に見てあまりに少ない女性研究者を育成するというミッションも課せられています。この流れに乗じて意識改革を進めて、若手研究者や女性研究者、女性医師を増やす試みを加速させていきたいと考えています。若手研究者に関しては、かつて好評を博した咸臨丸事業を再開することになりました。

門川　咸臨丸事業の対象は何人くらいですか。

金井　現在のところ、独立准教授や独立PIというポジションでの5ユニットを想定しています。まだ公募をしていない段階ながら多数の問い合わせがあり、すごい反響です。

松本　研究ということでは、慶應病院は革新的な医薬品医療機器開発に資する研究を行う臨床研究中核病院でもあります。しかし、新型コロナの影響もあって臨床研究中核病院を取り巻く環境は年々厳しくなっており、昨年にはいくつかの国立大学でも要件未達がありました。慶應病院も厳しい状況にありましたが、2020年から臨床研究推進センターが中心となって進めてきた臨床研究活性化プロジェクトが実を結び始めています。例えば、病院からの資金的支援や公的資金を獲得するためのバックアップ、優れた研究成果をあげた研究者に対する表彰制度などを実現してきました。今後は、臨床研究中核病院としての慶應病院がより発展できるように、病院全体で臨床研究を活性化させるシステムを構築しています。

門川　教育に関しては、コロナから脱却しつつある中でどのように変化しているのでしょうか。

金井　慶應医学部には先輩たちが築き上げてくれたネットワークがあり、医学部5年生の半分にあたる約50人が欧米を中心に1か月の海外研修に行ける仕組みがあります。ここ数年はコロナ禍で留学する学生数を制限せざるを得ない状況にありましたが、昨年からはより多くの学生が行けるように東南アジアの大学にも交流の場を広げました。医学部としては1学年110人の学生の中で、1人でも多く海外を経験してほしいですし、海外で学んだ人間力やコミュニケーション力を活かしてグローバル化に順応できる人材を育成していきます。

社会がものすごいスピードで変化していく中で、医学部を卒業した後の進路や求められるものも変わってくるはずです。そういったことも視野に入れながら、時代の変化に合わせてスピーディに変化する医学教育を展開していきます。今年はそのように変化を遂げる最初の年になると思っています。

門川　海外留学では、5年生の短期留学だけでなく3年生の自主学習があり、今年度は米国ジョンズホプキンス大学に2人、沖縄科学技術大学院大学（OIST）にも8人の学生が行きました。ジョンズホプキンス大学に行った学生たちはあちらの教師たちから大絶賛を受けたそうで、もっと早い段階でも海外に行かせられればと思っています。

金井　3年生の自主学習は10年以上続けていますが、大きな英断でした。このほかにも海外の大学で自主学習をやりたいという声がかかっているようですし、私たちとしても積極的に海外に行かせてあげたいですね。

門川　最近はヨーロッパの大学からの希望が増えていて、旅費を全額負担してもいいから来てほしいという大学もあるほどです。

金井　今の若い世代は内向きになりがちだからこそ、海外に行くことを当たり前と感じるような仕掛けを作ってあげることが大切だと思います。

門川　できれば早いタイミングで、全員行かせてあげたいですね。教育に関しては、昨年6月に学部間連携の拠点ともいえる教育施設ができました。

北川　常任理事として医学部、看護医療学部、薬学部という医療系3学部を担当してきて、3学部間連携の重要性を強く感じていましたし、各学部からも連携を強くしたいという希望が寄せられています。そのような中で2号館10階の北側にできたのが、医療系3学部と健康医療マネジメントを含む学部生と大学院生が交流できる教育エリアです。この場所が交流拠点となって、お互いが医療者としてのパッションを共有し、刺激し合いながら新しい発想が生まれることを期待しています。

門川　ダイバーシティの取り組みを本格化させるとのことですが、三四会との連携をさらに強固にする年にしたいと思います。

松本　病院の診療としては、最初にもお話しがあった通り、遠方の医療機関を受診する患者さんが減少している状況になり、これまで以上に地域の医療機関との前方連携、後方連携が重要になっています。今も慶應病院に患者さんをご紹介くださる施設の半分は三四会の先生方の診療所または三四会の先生方がお勤めの医療機関からであり、心から感謝しております。そのような前方連携をさらに強化すると同時に、私たちも後方連携といわれる逆紹介を進めていきますので、その流れをより強固にすることにご協力いただければと思います。

金井　三四会にはこれまでも多くのサポートや助言をいただいてきましたし、三四会は本当に頼りになる同窓会だと思っています。例えば、今医学部は国公立大学医学部に比べ、高額な学費問題に直面しています。そこで三四会の先生方には、是非、今年4月に設立する北里柴三郎人材育成基金へのご協力をお願いできればと思っています。北里柴三郎人材育成基金は学費軽減や留学支援などを目的としたもので、この基金を大きく育てて医学教育や人材育成の発展につなげられればと考えています。

北川　慶應義塾からも、あらためて「ふるさと納税」のことをお知らせさせていただきます。国公立大学と私立大学では財源の関係から学生1人あたりにかけられる教育費が明らかに異なっています。そのためのご寄付という形ではなく、「港区へのふるさと納税」は納税先を港区に変えていただくだけでその約7割が慶應義塾の支援になるという画期的なシステムです。返礼品がないということ指摘もいただくことがありますが、未来を担う若き塾生諸君への応援ということでご理解を頂けましたら幸いです。

門川　本日はどうもありがとうございました。三四会員の皆さん、今年もどうぞよろしくお願いします。

医学部長／医学研究科委員長
金井　隆典（67回）

医学部新聞編集委員長
門川　俊明（70回）

常任理事
北川　雄光（65回）

病院長
松本　守雄（65回）

WPIに採択された研究拠点として躍進 咸臨丸事業で若手研究者育成も加速

ダイバーシティの取り組みを本格化 三四会との連携をさらに強固にする年に

より多くの学生が海外留学を経験 新設拠点を核に3学部間連携も強化

鑑賞知来

愛かAIか。愛を語るには些か若すぎるゆえ、ここではご容赦いただき、AI、特に昨今話題の生成AIについて少しばかり書かせていただく。

2022年11月にOpen AIが発表したChatGPTを皮切りに、生成AIが世の中を席巻しつつある。私はAIの専門家ではないが、ChatGPTが発表された後、すぐに触れてみた。控えめに言っても衝撃的だった。研究に携わる日本人の前に立ち塞がる英語という言語の壁を、少なくともライティングやリーディングにおいては、打破してくれる可能性を感じ取った。すぐさま日本人の同僚に「ChatGPTを知っているか？これはすごいぞ」と言いふらしたことを鮮明に記憶している。その衝撃を周囲に伝えつつ、JAMA誌にChatGPTと言語障壁の打破、という主旨のレターを2023年2月に投稿し、同年8月に公表した（Matsui et al., 2023; doi: 10.1001/jama.2023.10588）。

ChatGPT発表、その衝撃から1年が過ぎようとしている（2023年11月時点）。たった1年だが、ChatGPTの進化は目覚ましく、多種多様なAIツールも続々と発表されている。無論、この世に完璧なツールは存在せず、ChatGPTをはじめとする生成AIも限界点や注意点はある。しかし、それらを補って余りあるほどに、その有用性は高く広く、今後、医療分野（臨床、研究、教育含め）にも影響を及ぼし、ゲームチェンジャーとなっていくことだろう。

今、世界中の教育機関も生成AIをどう活用するか施策を講じ始めている。使うか、使わないか、の議論ではなく、各分野でどう使うかの議論に移行していくであろう。私は、愛もAIも、完全に理解しているなどとは言えない。それでも、気づけばそこに愛がある、そしてAIがある、と誰もが口ずさむような、そんな時代がすぐそこまで迫っている。

（臨床研究推進センター教育研修部門　吉田和生　86相当）